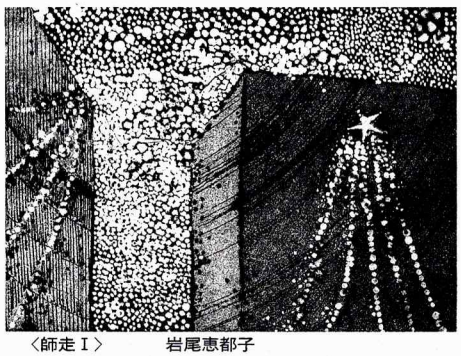
朝日 歌壇 俳壇



〈師走Ⅰ〉　岩尾恵都子

高山れおな選

寒昴老人Aと申します　（紀の川市）橋本　哲次
義士の日やシングルノットきつく締め　（北本市）萩原　行博
天然と看板掲げ鯛焼屋　（那珂川市）松川八智代
電線が月を切り裂き冬ざるる　（川越市）大野宥之介
穴まどひ真一文字のまま去れり　（相模原市）井上　裕実
老後にも起承転結日記果つ　（栃木県壬生町）あらゐひとし
レノン忌や空のまほらを見てたはず　（羽曳野市）玉田　一成
冬落暉駅舎つらぬく連結音　（浜松市）野畑　明子
☆寒晴や生まれた家で老いてゆく　（玉野市）北村　和枝
ひとり来て父の墓前に年惜しむ　（境港市）大谷　和三

【評】橋本さん。愛嬌たっぷり。同じく星空に対しても〈天の川のもとに天智天皇と虚子と〉や一茶〈我星は上総の空をうろつくか〉とはだいぶ違う。萩原さん。大石内蔵助も兜の緒をきつく締めたはず。松川さん。天然の鯛焼とはこれいかに。

小林貴子選

冬来ると聞けば小さき闘争心　（松戸市）橘　玲子
おでん屋の噂にて知る彼の婚　（川西市）糸賀　千代
楸邨を諳んずる日や落葉掃く　（国分寺市）後藤真里子
お待たせと待つてもないが寒気団　（別府市）樋園　和仁
詩人青星へ人類まだ孤独　（塩尻市）田原　章弘
七五三互いをちら見姫と姫　（相模原市）鹿野加代子
立ちつくす落葉だらけで道がない　（熊本市）村山美津雄
くわうえふや旧仮名遣ひおもしろし　（倉敷市）森川　忠信
身上は丈夫なること根深汁　（姫路市）大田　久子
おでん酒老いたるゆゑに湧く泪　（昭島市）大関　崇央

【評】一句目、冬に向かう気持ちを「闘争心」と言われると心が引き締まる。二句目、口に出さず、表情も変えずにショックを受けている人がおでん屋の一角に。三句目、加藤楸邨には愛誦に足る句が多い。八句目の「くわうえふ」は「黄葉」。

長谷川櫂選

大陸の雪の白なり大白鳥　（日立市）加藤　宙
凩やまた幻の救急車　（川越市）横山由紀子
さびしさに光寄せあふ寒昴　（長崎市）下道　信雄
俳句欄ひらけば日本中が冬　（栃木県高根沢町）大塚　好雄
湯豆腐や心の清き酒の友　（横浜市）本松健治郎
霜の夜は星の匂ひが充満す　（富里市）遠藤美津子
夥しい数の古着や山眠る　（富士市）村松　敦視
故郷の義仲寺遠し翁の日　（岐阜県池田町）小田　信之
恋をせし頃の唄聴く夜長酒　（茅ケ崎市）藤田　修
雑踏に心落ちつく十二月　（境港市）大谷　和三

【評】一席。堂々たる一句。「大陸の」が平凡を恐れぬ大胆さ。二席。「幻のちまた」（芭蕉「おくのほそ道」）を行く幻の救急車。三席。昴はプレアデス星団。谷川俊太郎「二十億光年の孤独」の世界。十句目。これもまた「幻のちまた」。

大串章選

産声をあげずに逝きて凍星に　（日光市）土屋　恵子
蕉翁の歩幅を想ふ枯野かな　（横浜市）渡辺　萩風
再読に若き傍線冬銀河　（仙台市）柿坂　伸子
被爆桶冬のひかりにきらめけり　（長崎市）佐々木光博
戦争が隣に座る日向ぼこ　（さいたま市）齋藤　紀子
☆寒晴や生まれた家で老いてゆく　（玉野市）北村　和枝
干蒲団ふはふは日和夢日和　（東京都大田区）黒崎　康夫
濁酒ひとりで祝ふ誕生日　（石川県内灘町）山本　正浩
吾のほか動くもの無き冬野かな　（東かがわ市）桑島　正樹
自画像は若き日のまま山眠る　（岡山市）沖　直保

【評】第1句。流産か死産か、産声をあげず凍星になってしまった。悲しい。第2句。「旅に病で夢は枯野をかけ廻る　芭蕉」を思い、旅人芭蕉の「歩幅」を想う。第3句。再読した本に若い頃の傍線が記されている。あの言葉は今も忘れない。

うたをよむ　家族という主題

土井礼一郎

なんの花か知らずにあなたが買ってきた火花をときどき散らすその花
当たり前のようにほかの誰とも違うあなただけのそのあたらしい声

堀静香『みじかい曲』が描くのは、一人の女性の結婚から出産までの物語。しかし、他人にも了解されやすいライフステージの変遷とは別に、ずっとかわらず低回し続ける自我がある。その自我の居心地の悪さこそが本当のテーマであろう。

引用は歌集の序盤と終盤から。一首目の「あなた」は夫で、「火花をときどき散らすその花」とは、結婚という社会制度に本心ではすんなり従うことのできない主人公の気持ちを暗示しているのではないか。片や二首目の「あなた」は生まれてきた子供だが、出産の喜びを直截には描かず、その生の出発から子供を一個の独立した自我として認めようとする。

今日夜道あかるく見えて妹と背中合わせでいると思った
うたたねのあとの砂漠に浮かんでる一昨日の妹のこんばんは

だいぶ雰囲気を異にするものの、今年刊行の歌集のうち家族という主題でもうひとつ度肝を抜かれたのは桃沢知世の『あおむけの踊り場であおむけ』。この歌集には主人公以外、妹しか登場人物が出てこない。

帰宅中、なぜか背中で妹の存在を感じる。寝起きのぼんやりした頭には一昨日の妹の挨拶が浮かぶ。はたしてその「妹」は実在するのか。〈いない妹〉だとしても、彼女を愛することの静かな充足感だけはたしかにここに描き留められている。

（歌人）

風信

三村純也句集「高天」　「山茶花」主宰の第6句集。「今日来よと今来よといふ牡丹かな」「鰭酒に思はせぶりなことを言ふ」「汀子恋ふ心に年を惜しみけり」（朔出版・2970円）

坂本宮尾著「竹下しづの女の百句」　明治生まれの女性俳人の作品を鑑賞。「短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎」「ペンが生む字句が悲しと蛾が挑む」（ふらんす堂・1650円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。